

ホルモン濃度で予測

糖尿病発症の危険性

ば、早期予防が可能になる。調査と分析を進め、予測の精度を高めたい」と話している。

健康な人が糖尿病になる将来リスクを予測する上で、脂肪細胞から出るホルモンの濃度が有効な指標となることが、徳島大学病院の船木真理（まこと）・糖尿病対策臨床研究センター長の研究グループの調査で分かった。船木センター長は「危険性を予測できれ

このホルモンは、脂肪細胞から分泌されるタンパク質の一種「アディポネクチン」。肝臓や筋肉で脂肪を燃焼させ、肥満やメタボリック症候群を抑える働きがある善玉ホルモンとされる。

研究グループは、県内に住む20〜60代の健康な男女806人を対象に、2008年から調査を開始。食事や運動など生活習慣の聞き取りに加え、身体測定や血液検査を行い、年1回の調査を4年間継続した424人（男281人、女143人）のデータを分析した。

被験者の血液中のアディポネクチン濃度を調べたところ、アディポネクチンが減少傾向にある人は、その時点で血糖値が正常であっても、何年か先にはさらに血糖値が上がるなど糖尿病の危険性が高まっていると予測できる結果となった。研究グループでは、アディポネクチンに着目

徳島大学病院 船木センター長 調査で指標判明



健康な人を対象に糖尿病リスクを調査したデータについて説明する船木センター長—徳島大学病院

「早期予防が可能」

することで1年以上前から糖尿病を発症する危険性が予測できるとみている。

調査では、血糖値が正常範囲にありながらやや高めの人（08年度22%、10年度38%と増えていったが、11年度は33%で改善に転じた。被験者が無意識に生活習慣を見直したことも改善の一因とみられ、どんな生活習慣なら血糖値が改善したり悪化したりするのかも調査分析を重ねる。

研究グループは、血中のアディポネクチン濃度がどの程度まで減少すれば糖尿病になる危険性が高まるのか、その判断基準となる「基準値」も突き止めた考えだ。

（大塚康代）